

JR総連は、JR東海労新幹線関西地方本部と同じような“定期大会における真実を明らかにする”意図を持っているのかわからないが、「JR総連第40回定期大会特集」なる職場討議資料を6月にひっそりと発行した。“ホームページへの掲載・部外者への拡散は禁止”という原則のもと、加盟単組・各級機関定期大会での配布等を行っているようだ。

その内容は、言わばJR総連第40回定期大会の議事録からJR東海労に関する内容を抜粋したもので、具体的にはJR東海労選出の本橋浩司代議員やJR総連近畿地協選出の津崎修代議員の発言、その他JR東海労に関する代議員の発言を掲載しているほか、議案承認の際の詳細なやり取り、熊谷茂前書記長の総括答弁や柳明則副委員長の閉会挨拶が掲載されている。

同定期大会の内容は、機関紙「JR総連」第311号(2024/6/15付)にも掲載されており、内容的に真新しいものはないが、興味深いのは柳副委員長の閉会挨拶だ。

## “JR総連 vs JR東海労”問題の行方：中

# 正当性を主張する中で組織の本質を露呈する JR 総連

柳副委員長は閉会挨拶の中で、JR東海労を批判する文脈から、かつてJR総連として全面的に支持・支援してきたJR東海労の「蒲郡事件」の“『たたかい』の歴史”を徹底批判したのだ。「蒲郡事件」とは2007年、JR東海労組合員であった加藤誠二氏が当時勤務していたJR東海・蒲郡駅において人事施策に関する非公開文書を盗んだとして懲戒解雇され、後に窃盗容疑で刑事被告人となった事件だ。これについて柳副委員長は、“加藤氏の懲戒解雇は内部文書をJR東海労ホームページに掲載したことが招いた結果”と指摘、言わば“加藤氏の自滅”と批判したのだ。これは、仲間をこき下ろし、自分たちの組織と運動をも完全否定する発言だ。産別が単組の軸運動を公然と叩き、唾を吐き捨てるような振る舞いと感じ、開いた口が塞がらない。。。

## 坊主憎けりゃ袈裟まで憎い…JR東海労の闘争をこきおろす柳副委員長

お世辞にも褒められた行為ではないが、JR東海労からすれば、自分達が反対するJR東海の人事施策に関する非公開文書を入手し、その結果懲戒解雇となった加藤氏は功労者であろう。そのため、実際にJR東海労は、“加藤氏の解雇は不当”“JR総連・JR東海労潰しの政治的弾圧だ”と加藤氏の裁判闘争を全面支援したが、後に完全敗訴している。この闘争をJR総連も全面支援し、さらに当時、JR東日本・浦和電車区における退職強要事件（浦和電車区事件）で元役員らの刑事裁判を抱えていたJR東労組もJR東海労と共闘する姿勢を示していた。ちなみに、柳副委員長はJR東労組の出身である。現在も調べれば、「蒲郡駅事件『不当判決』を満腔の怒りをもって糾弾する」（JR総連 2009/4/21 付）、「JR東海労 加藤誠二さんへの不当有罪判決糾弾声明」（JR東労組 2009/4/21 付）等の声明をWEB上で見つけることができる。

## 過去を否定してまで自組織の正当性を主張する“内ゲバ”体質を露呈

繰り返すが、柳副委員長が批判した「蒲郡事件」を巡る闘争は、JR総連も全面的に支援しており、例えば裁判の傍聴券獲得に多数の組合員を動員するなど組織を挙げて取り組んだ。それを否定することは、JR総連の“自己批判”以外の何物でもない。臆面もなくそれを口にし、さらには職場討議資料にまで詳細内容を掲載して“JR東海労が悪”との主張を繰り返す様は、JR総連が、“徹頭徹尾自組織が正しい”という姿勢の“内ゲバ”体質であることを露呈している。

“内ゲバ”とは“内部ゲバルト（ドイツ語で暴力の意味）”の略語。革マル派等の極左過激派は、それぞれのイデオロギーに基づき党派を形成しているが、党派内で分裂が起きた際、それぞれの党派が自らの正当性を主張し、暴力を用いて激しく争うことが常であり、それが“内ゲバ”と呼ばれている。過去、極左過激派の間では凄惨な殺人事件が多く発生している。こうした“内ゲバ”体質こそJR総連やJR総連加盟組合の本質と見ることができる。それはすなわち、役員の中へ浸透する革マル派活動家の本質とも言い換えることができよう。

このような職場や一般組合員とは何の関係もない内部のイデオロギー対立が、労働運動と言えるのだろうか。彼らの異常性について、改めて多くの方にご理解頂きたい。